

提出日：令和3年3月1日
所属：獣医学部 獣医学科
氏名：勝俣昌也 職位：教授
役職：生産獣医学系主任

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

獣医学部に所属し動物栄養学を専攻している教員として、獣医学科、動物応用科学科の双方で、動物栄養学関連の科目の講義と実習を担当している。また、獣医学科生産獣医学系に所属する教員として、畜産ならびに産業動物に関わる獣医学科の講義と実習を担当している。これらの講義と実習では、畜産に関わる国立試験研究機関に勤務した経験を活かし、近年の農業施策と関連した栄養管理、飼養管理についても講義している。

研究室では、ブタの栄養に関連する研究課題に所属学生と共に取り組んでいる。ブタの栄養の新展開としての「ブタの時間栄養学」、養豚現場を支える「ブタのアミノ酸要求量の推定」が、現在のおもな研究課題である。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医栄養学	獣医	必	3	約 140
獣医学概論	獣医	必	1	約 140
総合獣医学	獣医	必	6	約 140
獣医畜産管理学	獣医	選	3	約 140
産業動物臨床基礎実習	獣医	選	1	約 140
栄養化学	動物応用科学	必	2	約 140
動物飼養学	動物応用科学	選	4	約 80
栄養学実習	動物応用科学	選	4	約 20
研究室ゼミ	獣医・動物応用科学			約 15
卒論研究	獣医・動物応用科学			約 15

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1980年代に学生時代を過ごしたわたしたちは、指示どおりに動けばなんとかゴールにたどり着ける日々を過ごした最後の世代かもしれない。しかし、新型コロナウイルス感染拡大への対応でも明らかになったように、今はどこにも正解はころがっていない。だから、指示にしたがってもゴールにたどり着ける保証はない。指示が間違っていることの方が多いかもしれない。また、わたしたちの世代にとって、効率化は金科玉条だった。余分なものはそぎ落とし、ゴールにいち早くたどり着くことが求められた。しかし、そのことの弊害にわたしたちは直面している。複雑で多様でそれがゆえに非効率的な生態系を、わ

た私たちの世代は効率化の名のもとに壊し続けてしまった。もっとも深刻な問題は地球温暖化だろう。わたしたちの世代は責任世代ということを実感しなければならない。

そんな難しい社会に若者を送り出す責任世代の大学教員にとって、大学教育とはいかなるものであるべきか。この問いにも正解はないけれど、わたしは次のように考えている。学ぶことは変わる。学生生活のまえとあとの自分の変化を、学生たちに実感してほしい。そして、学ぶことは、自由な自分に近づく第一歩。自由な自分なら、どんなに社会が変化しても、希望を失わずに生きていけるはずだ。自由に近づく喜びを、人生をとおして味わってほしい。

最後に、若干技術的なことも書いておきたい。麻布大学獣医学部は「生き物」を学ぶところで、「科学」に関する素養を深める場と言ってよい。獣医学科の学生はもちろんのこと、動物応用科学科の学生も、自分が学んだ科学に関する素養を活かし、他者を支えることができる、そんな人に育ってほしい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

理念のところでも書いた「自分の変化を実感できる学び」には「大学生らしく学ぶ」ことが必要だと考えている。では「大学生らしく学ぶ」とはどういう学びかといえば、『「未知との遭遇」をとおして自分なりに考え「ほんとうのことに近づく」』がわたしの考えである。その前段として、土台としての基礎知識を講義や実習で習得する必要がある。その後の卒業研究では、まだ誰も取り組んだことのない「問い」に取り組む。この段階が「未知との遭遇」となる。研究なので、仮説どおりになるかどうかは誰にもわからない。がっかりすることもある。しかし、自分が習得した基礎知識を活かし、教員や仲間と議論しながら自分なりに考え、「ほんとうのことに近づく」経験こそが、「大学生らしい学び」であり、「自分の変化を実感できる学び」だとわたしは考えている。そしておそらく、「ほんとうのことに近づく」ために「大学生らしく学ぶ」ためには、効率的な学びは必ずしもふさわしくない。「大学生らしく学ぶ」ために、教員としてわたしが重視していることを以下に説明する。

土台となる基礎知識；わたしが担当している科目のうち、わたしがひとりで担当している獣医栄養学を念頭において説明する。獣医栄養学では獣医学教育モデル・コアカリキュラム（コアカリ）の臨床栄養学コアカリに準拠して講義の骨格を組み立てている。しかし、臨床栄養学コアカリだけでは、産業動物の栄養管理・飼養管理について講義できない。獣医栄養学は生産獣医学系の科目でもあり、産業動物について講義しなければ片手落ちになり、産業動物の栄養管理・飼養管理について講義を受けないまま学生たちは卒業していく。それではまずいだろう。畜産に関わる国立試験研究機関に20年以上勤務したわたしの経験を活かすこともできない。そのような理由から、それぞれの産業動物種の栄養管理・飼養管理、さらには産業動物の生産現場がかかえる問題点などについて、基礎的なことを講義している。しかし、これだけでは教科書的な知識だけを伝えることになり、学生たちが新しい気付きを得るには十分ではない。そこで、講義内容と関連する分野の新知

見や、栄養に対する動物のエレガントな反応に関わる知見などを、随時取り入れるようにしている。2020年度は新型コロナウイルス感染拡大によりオンデマンド教材の配信で講義を実施した。顔が見えない学生たちからのフィードバックを得るため、そして、学生たちが学んだ内容を振り返ることができるよう、「今日の講義で得た新しい気付き」について毎回200字程度の小文を提出してもらった。臨床栄養学コアカリの内容よりも、新知見や動物のエレガントな反応に興味を示す学生が少なからずいた。臨床栄養学コアカリ、産業動物の栄養管理・飼養管理に関する講義を大切にしつつも、学生たちが新しい気付きを得る工夫をしていきたい。

卒業研究 未知との遭遇；研究室に所属すると、学生たちは卒業研究に取り組む。「学ぶ」といえば必ず正解が用意されていた学生たちにとって、卒業研究は人生初めての未知との遭遇かもしれない。一方、誰も取り組んだことのない課題なだけに、見つけたことは自分だけの発見になる。わたしは学生たちと一緒にブタの栄養を研究している。栄養状態に対するブタのエレガントな反応をみつけることができれば、やっただけのことはあり、大きな喜びをもたらしてくれる。『淵野辺駅を歩いている人をつかまえて「こんなおもしろいことを見つけました！！」と言えるような発見をしよう』と学生たちには伝えている。しかし、思うようにいかないこともある。ブタはサイズが大きいだけに、物理的な制約が多く、一つの課題を完了させるのに数年かかることも珍しくない。また、複数の課題を同時に走らせることも難しい。こういう事情があるので、学生たちのアイデアで新たな研究課題を毎年設定することは、残念ながら、できない。ゆっくりでよい。じっくり取り組んでほしい。それだけに、学生たちが参加することになる研究課題の意義、目的、見通しは、（あたりまえだが）丁寧に説明するようにしている。また、ブタを対象とするのでチームで働くことが多い。面倒な仕事・作業に進んで取り組む、利他的であってほしい、と折に触れて話すようにしている。学生たちが自分の意見、考えを言いやすい雰囲気をつくりたいと願っているが、もしかしたらうまくできていないかもしれない。それでもダメ出しは最後の最後にとっておくように心がけている。

研究室ではゼミも開催している。英語のテキストの輪読と原著論文の文献紹介がゼミの2本柱である。以前、学生たちがいきなり本番に臨んでいたころは不十分な発表が多く、必ずしも有意義な時間とならなかった。そこで、本番の1週間前には発表資料を教員にみせて添削を受けるようにやり方を変更した。このことにより、発表者に理解が深まり、連動してゼミの参加者の理解も深まったようだ。しかし、ゼミでの質疑応答はなかなか盛り上がらない。質疑応答を盛り上げるのが次の課題だと考えている。

最後に、自分の発見を他人に伝えることも経験してほしい。関東畜産学会は、指導教員が学会員なら、学生は会員にならなくても学会発表できる。このシステムを利用して2019年度と2020年度に学生が発表し、2年続けて優秀発表賞をいただいた。この取り組みは今後も続けていきたい。

アクティブラーニングについての取組

現状とくに取り組んでいない。

ICT の教育への活用

新型コロナウイルス感染症拡大以前は授業の教材スライドを PDF 化したものを学理を介して配布した。2020 年度は必要に駆られたこともあり、学理を介して小テストやレポートの提出も実施した。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

① 教育（授業、実習）の創意工夫（A～C）

B 3. の教育の方法で書いたように、教科書的な知識を伝えるだけでなく、講義内容と関連する分野の新知見や、栄養に対する動物のエlegantな反応に関わる知見などを、随時取り入れて、学生の興味を持続させるように試みている。しかし、うまく伝えることができているかどうか、学生からのフィードバックを得る方法も工夫する必要がある。

② 学生の理解度の把握（A～C）

B 選択式の小テストを毎回実施している。しかし、選択式のままでは理解度を把握するには不十分かもしれない。2020 年度前期はオンデマンド教材で授業をすすめた。出席を確認するためにも、「今回の講義での新しい気付きについて」という 200 字程度の小文を毎回提出してもらった。こちらのほうが学生の理解度や興味関心について把握するには適正ではないかと現在は考えている。

③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

C 参考図書をあげ「予習することが望ましい」とシラバスには書いたものの、十分機能しているとは言えない。今後の課題としたい。

④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

A 対面授業で質問があったときは、その場で回答できるものはその場で回答する。持って帰って調べる必要があるときは、翌週の講義の時に「このような質問がありました、調べたところ、こういう回答になります」と全員に説明するようにしている。メールで質問があったときも上記と同様の対応をしている。

⑤ 双方向授業への工夫（A～C）

C 担当科目でどのような双方向授業があり得るのかイメージできていない。2021 年度は対面授業と遠隔授業の同時進行なので、ますます難しいかもしれない。走りながら考えることにする。

※A（十分実施している）B（実施しているが十分でない）C（うまく取り組めていない）

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

<p>6V の総合獣医学の「栄養学」の授業を担当している。国家試験の過去問題で「栄養学」に関連する問題を解説することになっている。</p>
<p>5. 学生授業評価</p>
<p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>配布資料の文字が小さすぎるという指摘をもらったことがあった。見えやすいように翌週から対応した。2020 年度、学理を介して小テストを実施したところ、正解と解説の開示が遅いと指摘された。これも速やかに対応した。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u></p> <p>配布資料の件は、その後指摘が続かなかったので、解決したと考えている。小テストの件は、学理の使い方が理解できたので、今後は問題ないはずだ。</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。</u></p> <p>2021 年度も学生の指摘要望には速やかに対応する。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>成績向上という点では特別に考えていないが、4. 教育方法の改善の取組で書いたように、学生の興味を持続させる工夫は継続する。</p> <p>② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</p> <p>学生の成果：関東畜産学会優秀発表賞の受賞（2019 年度と 2020 年度）</p> <p>学生からの評価：授業評価ならびに直接メールなどで寄せられた要望。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）</p> <p>2020 年 12 月 23 日の FD 研究会は総合獣医学の試験監督業務で参加できなかった。しかし、出張と重ならない限り FD 研究会には参加している。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>学生が自分の変化を実感できることを目指す。講義実習では学生の新しい気づきを大切にする。研究室活動では「ほんとうのことに近づく」喜びを学生が実感できるよう、新しい発見に向けてともに励みたい。</p>
<p>9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ</p> <p>授業に関するもの；シラバス、小テスト、レポート課題、試験問題、スライド資料、配布資料</p> <p>教育改善に関するもの；（わたしは記録を保管していないが）FD 研究会への参加記録 他者から提供されるもの；学生の授業評価、学生からのメール</p> <p>教育/学習の成果；関東畜産学会優秀発表賞の受賞（2019 年度と 2020 年度）、学生が作成した研究室ゼミのレジュメ</p>